

〔巻頭言〕

年会 2009 を終えて

*年会 2009 実行委員会委員長 東洋大学工学部

望 月 修†

2009 年度日本流体力学会年会は、2009 年 9 月 2 日（水）、3 日（木）、4 日（金）の 3 日間、東洋大学白山キャンパス（東京都文京区）の 6 号館を会場に行われました。都内で便が良いこともあり、参加者は 440 名（内、学生の新規登録会員は 42 名）、一般講演 290 件、受賞記念講演 4 件、特別講演 1 件と盛況でした。前年度の神戸で行われた方式にならない、分野の内容によって 6 会場に分けました。会場 1：安定性・乱流、会場 2：対流・拡散・渦・波動、会場 3：解析・予測・制御、会場 4：反応・多相系、会場 5：環境・地球・宇宙、会場 6：バイオ・マイクロ・スポーツの流れ、です。したがって、それぞれの会場では 3 日間通して共通の話題で討論が行われるように工夫いたしました。また、会場が異なっても聞きたい演題があるときはプログラムに載っているその時間に行けば聞けるよう、横並びに講演時間を合わせて進行いたしました。また、会場となった講義室の割り当ても、移動時間を短縮できるような会場の配置にも気を配りました。参加者が講演を聴くスケジュールを組みやすくするために、プログラムを見やすいように工夫いたしました。

実行委員の各自は会場のオーガナイザーを設定し、オーガナイザーは講演を募集するという段取りで行いました。また、幹事として会計・総務に東京理科大の石川仁先生、WEB および講演プログラムに電通大の高橋直也先生にご尽力いただきました。実行委員会としては関東圏の異なる大学および企業の人たちで構成されているために、開催の 1 年前から会合を開き、互いの意思疎通を図りました。頻繁に会合を開けない分、学会メーリングリストの電子メールを通じて意見交換を行いました。講演会までの準備期間中にはいろいろ予期せぬことがもちあがりましたが、メール会議で迅速に対応できたと思っております。準備万端の結果、開催日当日がもっとも静かに過ごせた時間となりました。

初日は 9 時から開会式での宮内敏雄会長の挨拶に引き続き、船越満明先生の司会により学会賞の受賞講演が、論文賞として名古屋工業大学の森西洋平先

生、竜門賞として名古屋大学の長田孝二先生、技術賞として九州大学の大屋裕二先生によって行われました。10 時半からは各セッションに分かれ一般講演がスタートいたしました。昼食時には会長を囲む会を別棟の会議室で開催し、会長との話し合いを行いました。昼食後 13 時から午後のセッションが始まり、もっとも遅くまでかかったものでも 18 時 20 分までには終わりました。

2 日目は 9 時からのスタートで、12 時 10 分までの午前のセッション、昼食を挟んで、13 時 30 分から 50 分間の特別講演として東洋大学 菊地章太先生による「UFO と円了妖怪学」をお話していただきました。東洋大学で流体力学会講演会を開催するので、東洋大学の創設者である井上円了博士がまとめた広く知られている「妖怪学」をお話しして頂こうと言うことで菊地先生に依頼いたしました。流体力学との関連を付けるために、UFO というものも交えてのお話は、菊地先生独特の語り口調もあって聴衆を魅了いたしました。不可解なものを解明するという姿勢・哲学は領域を超えて、サイエンスに取り組む者への教訓があったと思います。午後のセッションは 13 時 30 分から 18 時 20 分まで行われました。18 時 30 分からは別棟の 16 階にあるスカイホールで 2 時間の懇親会が行われました。スカイホールからは都内を一望でき、大都会の夜景を彩る光の中に浮いている感覚を覚えました。東洋大学のサークルの一つに「マジック」があり、部員たちによる手品を披露し、懇親会の雰囲気さをさらに和やかにしてくれました。

3 日目は 9 時からのスタートで、12 時 10 分までの午前のセッション、昼食を挟んで、13 時 30 分から 50 分間の FDR 賞の受賞特別講演をウィーン大学の Adrian Constantin 氏に頂きました。その後 16 時 30 分まで午後のセッションが行われ、閉会となりました。

講演会収入として、参加登録費、懇親会参加費、広告・展示収入、論文集収入、会場である東洋大学からの補助金です。その総額約 360 万円となりました。その支出としては印刷費、特別講演謝礼、懇親

*〒350-8585 埼玉県川越市鯨井 2100

† E-mail: mochizuki@toyonet.toyo.ac.jp

会経費、アルバイト経費、弁当・お茶代、旅費、通信運搬費などです。

運営上の反省点として、いくつかあります。その一つに、毎年別な会場で行われるために、実行委員に多大な負担をかけることです。マニュアル化されてそれが引き継がれるとよいと思います。この度は、昨年の開催校である神戸大学から多くの資料、助言を頂きました。おかげで、方向を失わずに開催できました。ただし、開催地の事情が異なるために、全く同じにはできないことなどから、現場にあわせた修正などが必要となってきます。実はそこが一番大変なところとなります。この部分の引き継ぎもできればと、メーリングリストには次回の開催地実行委員にも参加していただきました。このため、頻繁なメール会議メールが届き、かえってご迷惑をおかけしたかと思います。開催マニュアルおよびアルバイト学生説明マニュアルの整備が必要です。これに関しては次回実行委員に引き継げるかと思っています。講演会申し込みおよび参加費支払いの WEB 化を学会として進めるとよいかと思っています。

講演会として、本来あるべき姿として、参加者に満足していただけたか？ということが開催者側としては一番気になることです。参加者側でいるときはこうすればよいとかこんなことに注意すればよい、といったことが見えますが、いざ開催してみるといろいろな事情でできなかつたりすることもあります。本来あるべき姿というのは、学会というのは情報交換の場であるし、議論の場です。けんけんがくがくやり合って、参加者は満足するのではないか。セッションにおいて、自分の順番が来たので発表します、質問ありませんか、時間なので次の発表に移りますといった、ベルトコンベア式では、おもしろくないということで、もっと議論の活発化を狙った試みが会場ごとに専門の近い分野を集めたということだと思います。これがうまくいったのかどうか、今後これでよいかといったところは、いろいろな場で議論されることを期待いたします。もうひとつ、学生発表の機会を与えることが各大学で要求されていることなので、学生の発表が多くなるのは仕方ないとしても、流体力学会だけは教員側がプロとして研究内容を話すことが必要ではないかと感じています。研究内容をよく理解しないで話をしている学生の発表に対して、もし質問やコメントをしても、わから

ないだろうと先読みするので、議論にならないのではないかと思います。話す内容が同じでも、理解して発表する人の話はおもしろいし、研究のヒントになる示唆も多く含みます。実行委員を終えた開放感から、無責任な提言をさせていただければ、「流体力学会年会発表者は教員に限る」という一言を講演募集に付けていただけると議論の活発化につながるかと思います。毎セッションの講演が特別講演みたいで、流体力学会でしかあの先生の話の聞けないということであれば、ほかの講演会とは違う付加価値の高さで、盛り上がると思います。やってみませんか？

年会 2009 の実行委員は以下の通りです。

実行委員長	望月 修（東洋大学 理工学部）
幹事	石川 仁（東京理科大学 工学部）
幹事(Web)	高橋 直也（電気通信大学 大学院 電気通信学研究科）

実行委員

跡部 隆（宇宙航空研究開発機構）
伊藤 慎一郎（工学院大学 工学部）
尾崎 晴男（東洋大学 総合情報学部）
榊原 潤（筑波大学 大学院 システム情報工学 研究科）
杉本 剛（神奈川大学 工学部）
高木 周（理化学研究所 次世代計算科学研究 開発プログラム）
田村 善昭（東洋大学 総合情報学部）
中林 靖（東洋大学 総合情報学部）
長岡 嘉浩（（株）日立製作所 機械研究所）
平原 裕行（埼玉大学 大学院 理工学研究科）
深潟 康二（慶応義塾大学 理工学部）
宮寄 武（電気通信大学 大学院 電気通信学研 究科）

ご苦労様でした。誌面を借りて感謝申し上げます。

また、慶応大、工学院大、東京理科大、東洋大から延べ人数 77 名の学生たちにアルバイトとして協力してもらいました。ご苦労様でした。

協賛として、34 の学協会から頂いたことも感謝いたします。